

EASTER ISLAND CHILE

大友慶孝といやしの旅へ

ようこそ!「イースター島」の世界へ
シリーズで紹介していきます。

アクセスありがとうございます。感謝いたします。



Oil-painting work -1

【躍動】100号油絵

●高い文明を持った民族が、遥か彼方の南米大陸から、トトラ葦の舟に乗って、このイースター島に訪れたといわれています。また、ハワイ、タヒチ、イースター島を結ぶ三角形のポリネシア地域のマルケサス文化を持つポリネシア人渡来説もあります。そして、「モアイ」のルーツは、アジアとする説も発表されています。解き明かされない謎が残るイースター島。神秘に満ちた巨石文化の島であることにかわりありません。



Oil-painting work -2

【美しい海にきらめく波しぶき】50号油絵

●雲間に見隠れする太陽の日差しの変化で、まるで生き魚のごとく波間に白い波しぶきが碎け散る。この小さな島で繰返される異常なまでのドラマを誰にも見せまいとするかのように、大きなうねり波は、鋭くとがった岩肌に激しく突進してくる。寄せくる自然のリズムは、いったい、いつまで繰り返されるのだろうか。



Oil-painting work -3

【水平線の向こうに】50号油絵

●大津波によってモアイは倒れ、
海の底に沈み二度と還ってこなかった。
残されたわずかの石片は、仲間の悲しみを、
波と風の音楽でいやしているように見えるのです。
自然が刻む残酷さ、やさしさ、力強さに立ち向かうことなかれ、
まさに、時のすぎゆくままに……。



Oil-painting work -4

【モアイは語り出す】50 号油絵

●制作されたモアイが唯一海に向かって
アフ(台座)の上に立っているアウ・アキヴィのモアイ達は
海に向かって吹き抜ける風に
乗せるかのようにメッセージを
発信しているのではないかと思えるぐらい
一人ひとりの表情が個性を持ち、
言葉の内容に微妙に反応しているかのように見えるのです。
横一列から見ると7人ではなく、
もっともっと大勢がいるように錯角する。
イースター島のモアイにとっての1日の始まりは
夕陽が沈む瞬間からがスタートなのかもしれない。



Oil-painting work -5

【美しい浜辺が演出するモアイの雄姿】50号油絵

- この島で最も美しいアナケナの浜辺に立つモアイ像を正面から見るとその顔は、いたずらっこに見える。しかし、横からの表情は、ひときは神経質に見える。とくに、右横顔は神経質で近寄りがたい。左からの表情には「大人と少年のような微妙な感情表現さえも感じさせる彫刻家の力量を見せつけられた思いです。



Oil-painting work -6

【絶海の孤島】50号油絵

●イースター島に住んでいた古代の人々は
この島を離れ、他の人々と出会うためには、
誰よりも遠く長い旅を覚悟しなければならない。
水平線の向こうの世界を夢見た島の人々は
冒険を試みたのだろうか。



Oil-painting work -7

【8体のモアイ像がうつ伏せにされている】50号油絵

●ラノ・ララクから直線で4キロあまりの地点に
8体のモアイ像が倒されたままになっている。
あきらかに自然の流れの中で倒れたものと違い
意図的に破壊され、頭部も割られている
侵略者たちによるものなのか、
彫刻家たちの怒りの破壊なのか。
作り上げるためについやした歳月
山裾から運んできた汗と、涙と喜びは
壊すというむなしい行為によって
二度と蘇がえさせることを失ったのである。
破壊者の愚か者め！



Oil-painting work -8

【ポイケに続く夢街道】50号油絵

●目が発見されたアナケナの浜辺から
海岸ずたいに歩いて数キロの地点。
荒涼とした道の先にポイケと呼ばれる山が見えてくる。
左端の3つの突起が人間の横顔に見えるから不思議だ。
大地の草原は赤土が露出し、夏から秋へと・・・。
そんな季節の移り変わりにも、
ポイケの山裾は緑の草原であふれ
左手は紺碧の海。
右手はモアイ誕生の地、ラノ・ララクが見える。
正面には、長耳族と短耳族との存亡を賭けた
民俗争いの場所ポイケの山が、
胸をときめかしながら向かう私を
悠然として待ち受けてくれるかのようだ。



Oil-painting work -9

【藍色に染まる】50号油絵

●ハンガ・テテンガと呼ばれる海岸から
10キロに渡ってつづく海岸線。
寄せては返す波の繰り返しは
はじける波のしぶきで、白と藍色のコントラストが美しい。
絶海の孤島を取り囲む波は
よそ者をこばむ強い意思に見えるのです。
かつては、大樹で覆われていた大地も
巨大なモアイを運搬するために伐採してしまったことで、
激し雨、風により流出する土は、
さらに大地を弱らせ食糧生産も困難な
赤茶けた火山岩が露出する
荒廃した島となってしまったのです。



Oil-painting work -10

【自分探しの旅】50 号油絵

- モアイ像制作の地、ラノ・ララクを背に一人立ちつくす。
日本の太平洋側にもおよぼしたほどのチリの大地震による津波で破壊されたトンガ・リキの浅瀬に続く場所。
遥か彼方の天空を見上げるモアイの横顔に、未来にかけるエネルギーを感じたのです。



Oil-painting work -11

【イースター島の主役】100号油絵

●ラノ・ララクの山裾に点在するモアイ群は、およそ300体。制作したモアイを、数キロある定めた場所まで運び立てたとする仮説は真実だろうか。制作途中で放置されたままの凄まじい光景を見せつけられると丸木をコロとして気の遠くなるような運搬労力を費やしたのではなく想像を超えた能力を持つ人々の力が成せるものと思えないのです。制作場所から、海を背にして島民を見守るかのようにして立てる優しさは、数十トンという巨石と闘い続けた古代の人々だからできたのかすべてが科学的に証明できなければ、真実として受け入れられない現代ではむなしい推測なのだろうか。



Oil-painting work -12

【100トンを支える台座へのこだわり】50号油絵

●アフ(台座)にかかる重量は100トンにおよぶ。
20トンあまりのモアイを7体、このアフの上に立てたのです。
重量だけでなく、
揺れにも耐えられるように計算された石積みにクサビ。
わずかに丸みを持たせた石の壁や、随所に残された技術に
制作者の温かい感性を見た。
放置されたアフとは対照的に、
青空にのびやかに
羽を拡げた鳥たちの嬉しそうな姿が胸を刺す。



Oil-painting work -13

【真夏の長い影】50号油絵

- 過去にでも、未来にも自由に往来できるような気持ち、そんな不思議な空間がここにはあるのです。
胸のときめきは、戻れない過去。
戻りたくない過去。行ってみたい未来。
今のままでいたい現在、過去、未来へと迷わせる。
この島で繰り返された壮絶なドラマは、
生きることの喜び、悲しみ、怒りを、全て包み込んでくれる。
力強い優しさが伝わってきます。



Oil-painting work -14

【時間よ止まれ】50号油絵

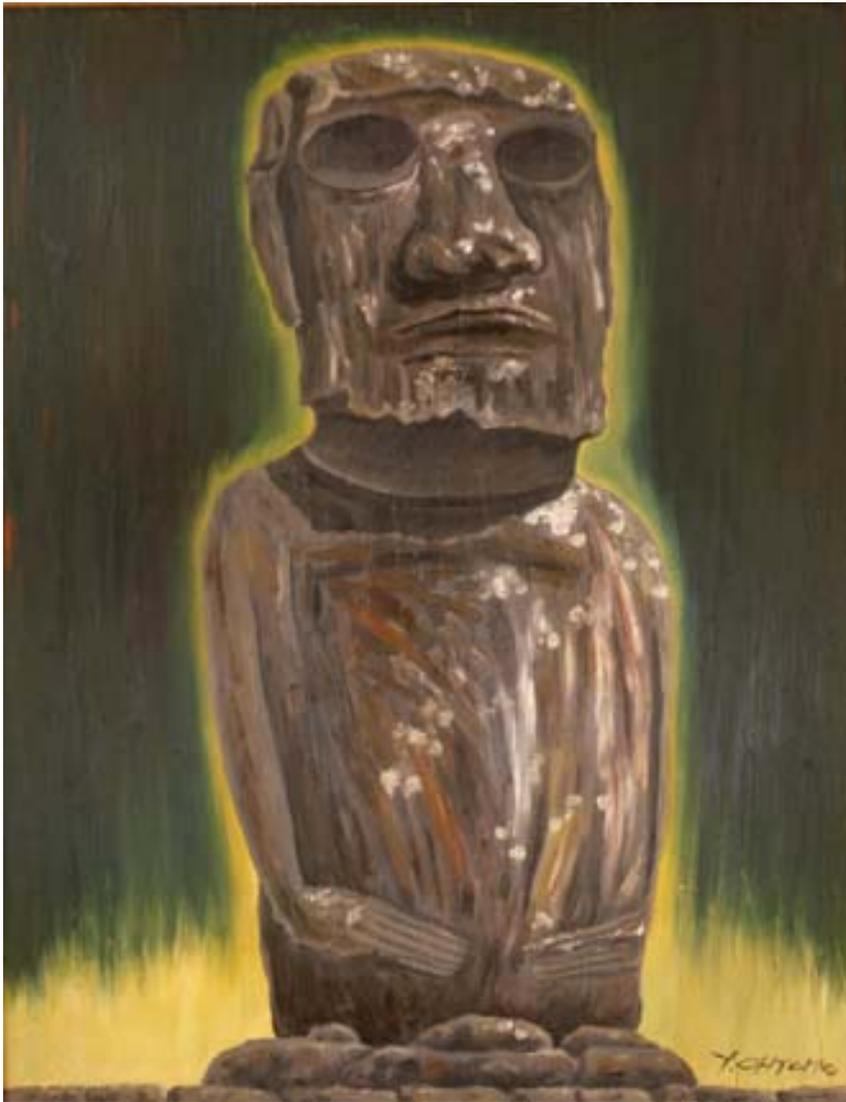
●南米チチカ湖に群生するトトラ葦が、このラノ・ララクの火口湖にも群生することから、考古学者トール・ヘイエルダールは、葦舟による訪問者での古代南米アンデス文化との共通性を主張しています。山頂から眺めていると、この湖水の底には、人類の歴史を塗り替えるほどの大発見の遺産が隠されているような気がしてならない。



Oil-painting work -15

【見つめられて】50 号油絵

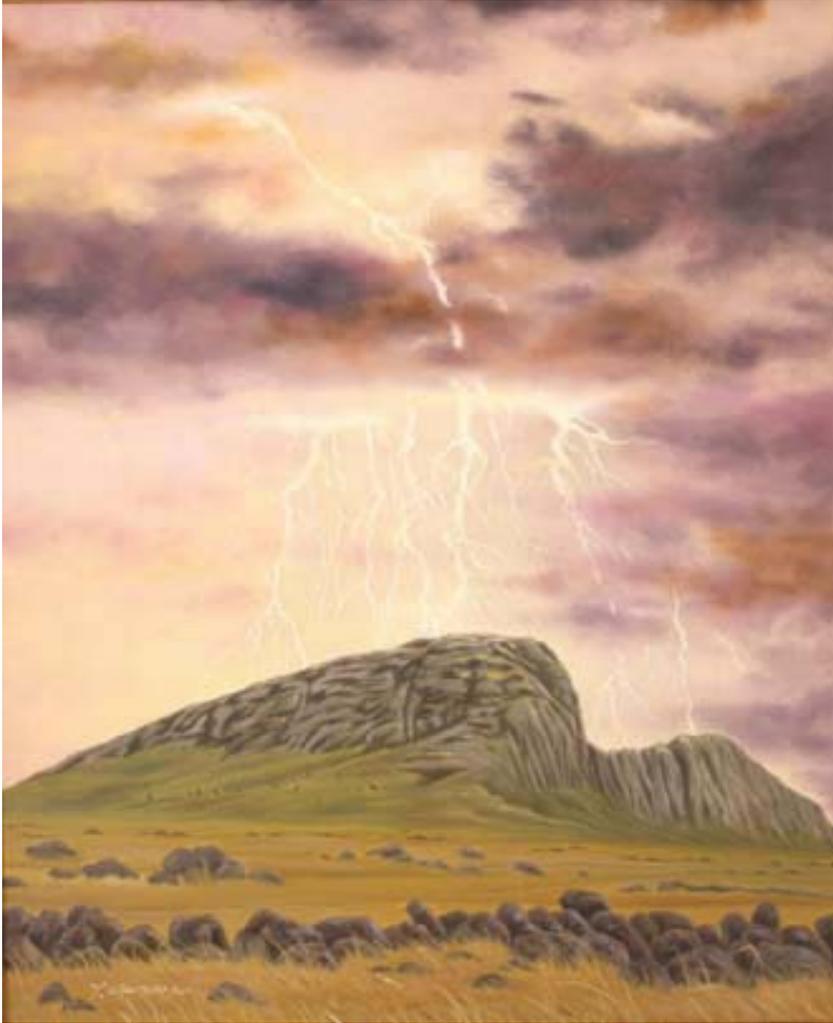
- この島で一番きれいな海岸を背に
女性的なモアイ像が7人で立っています。
その一人の姿に引き付けられて描いたモアイ。
目鼻立ちは他の場所に立つモアイと、かなり異なり、
繊細で、もの悲しささえ感じられます。
感情表現まで込められた制作者の感性に圧倒されます。



Oil-painting work -16

【夜空の星に願いを】50号油絵

●夕陽が沈み、その後、一瞬にして周りは暗くなり、しばらくは足元さえも見えないのだ。
燃え落ちる太陽を見過ぎて、しばらく視力が混乱したのだろう。
やがて、夕闇の中にモアイの表情がはっきりと確認できた。
月夜に照らされ、天空の輝く星に願いを発信しているのか、それとも、受信しているのだろうか、
そんな気持ちにさせてくれる静かな夜。



Oil-painting work -17

【地球生命の光り】50号油絵

●ひたすら、山肌に刻み続ける古代の人々の気迫がせまってくる。
圧倒される巨大なモアイ誕生の地。

ラノ・ララクに鋭い閃光が走る、地面を駆け抜ける落雷音と地鳴り。
足の指、手の指、脳内部のすみずみにまでエネルギーが
注入されるかのようだ。

地球の自然蘇生こそ落雷ではないか……。

これこそ、地球に生きるすべての生命に
力を与えてくれる、と確信した瞬間。

落雷よけの樹木や岩陰もない無防備の草原に立ちつくす。

イースター島に滞在して、はじめて知った雷の力、怖さ、美しさ。

そして、美味しい空気と心地よい夕メ息。